

宗教学宗教学史学

◇教員◇

教授：藤原聖子、西村明

准教授：富澤かな、渡辺優

専任講師：志田雅宏 助教：佐藤清子

◇学生◇

学部：30名、修士課程：6名、博士課程：24名

(1) 宗教学を学ぶとどうなるか

「宗教学を学ぶとどんないいことがありますか？」——ChatGPTに聞いてみた。回答は以下の通り（2024年3月現在）。

1. **多文化理解**: 宗教学は、世界のさまざまな信仰体系についての理解を深めることで、異文化間の寛容性と共感を促進します。異なる文化背景を持つ人々と効果的にコミュニケーションを取り、共存のための基盤を築くことができます。
2. **批判的思考能力**: 宗教的テキストや慣習を分析する過程で、批判的思考や論理的な議論を構築する能力が鍛えられます。これらのスキルは、学問的な研究だけでなく、日常生活においても重要です。
3. **倫理的・哲学的深化**: 宗教学は、人生の意味、倫理、存在についての基本的な問題を探求する機会を提供します。これにより、より深い自己理解と、周囲の世界への洞察が得られます。
4. **キャリアの可能性**: 宗教学の知識は、教育、国際関係、社会サービス、メディア、文化施設の管理など、幅広い分野でのキャリアを支援します。グローバル化が進む現代において、宗教的な理解は多くの職業で重宝されます。
5. **自己理解の促進**: 宗教学は、自己の信仰や価値観を深く掘り下げ、他者との関係性を再考するきっかけを提供します。異なる視点に触れることで、自分自身と世界を新たな目で見ることができます。

さすが ChatGPT、気持ちを前向きにしてくれる名答だ。2年間の学びでこれだけのことが身についたら素敵だと思った人には意外かもしれないが、

実は、本専修課程の学修効果はこれら5点に留まらない。これらを相対化していく広い視野が身につくのだ。どういうことか。

1は一見もっともだが、異なる宗教を理解することは常に共存につながるのだろうか？ 宗教情報がその地域の侵略に利用された例は枚挙にいとまがない。宗教学はその危うさを含めて多文化理解なるものを掘り下げる。

2の批判的思考力の重要性は全くその通りだが、なぜその対象が宗教的テキストと慣習に限定されているのだろうか？ 宗教はその2つだけから成るのか？ しかも、他人が信じる聖典を批判してしまったら、異文化理解ならず、1と矛盾しないだろうか？

3は宗教学の授業の間接的効果だ。確かに価値や倫理の領域に踏み込むが、教員が特定の教えを示し、それに従えばより良い人生が送れると説くことはない。それは各学生の自由に任されている。これは宗教学と宗教教育（宗教系の学校の宗教科の授業）の違いでもある。

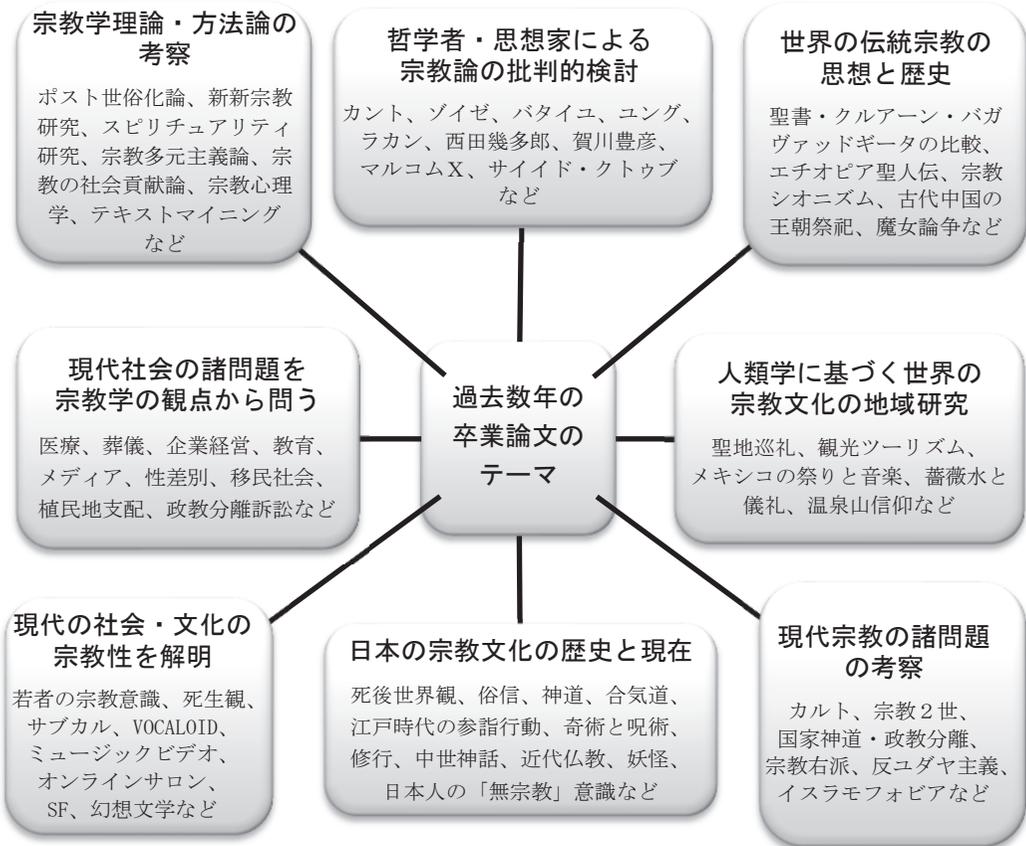
5は3と同じく副次的効果だ。時間がゆっくり流れる文学部では、5のためにひとり静かに宗教書に向きあうことも可能だ。しかし5といい3といい、自己理解の必要性が強調されているが、宗教は社会現象でもある。このご時世、宗教と社会・政治の関係を分析することも重要では？

1～5の全体について気になるのは、いくつかの前提が潜んでいることである。まず、学びを人生や社会に「役立たせよう」という意識がいささか過剰なこと。これは「どんないいことが」という質問のせいかもしれないが、何のために役立たせようとしているのかを見極めずにただ従う態度には危うさも潜む。また、学ぶ側が信仰を持っていること、あるいは宗教は個人的・内面的なものということが想定されていないだろうか。ここから裏返しに推論されるのは、ChatGPTのデータソースは、社会の多くの人が自覚的に宗教的信仰を持ち、さらにコスパを重視する国がメインだということ。それが世界の標準になる前に、あるいはなつた後でも、その底にある価値前提をより広い視野から見ることができる本専修課程で学ぶことは誰にとっても力になるだろう。

(2) 学生の関心

本専修課程に集まる学生の問題関心は多彩である。それも研究の分野や方法論が多様なだけでなく、学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは卒業論文のテーマにもよく表れている。

研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっている。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。



(3) 専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を

突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分映し出す合わせ鏡であったりするるのである。つまるところ、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。

(4) 教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、(平成27年度より)指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

藤原 聖子：学部では宗教を理解するとはどういうことかという方法論的関心から出発し、西洋近代的な枠組みに基づく宗教学の理論を比較研究のためにどう組み直すか、変化する現代の宗教の諸相をどうとらえるかに取り組んできた。本年度は、宗教学の主要な理論を映像作品に対して「使ってみる」ことを目的とした講義と演習、陰謀論などを「虚構」をキーワードに宗教学的に分析する演習、内定者向けにはアクチュアルな問題に宗教学がどう応えるかを知る講義と、宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする演習を開講している。

西村 明：卒論以来、他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、非常時の犠牲者の慰霊を中心テーマとしている。そこから、より広い戦争と宗教の関わりについても関心の射程となる。本年度は慰霊についての概論と近現代日本宗教史の概説講義のほか、演習ではそれぞれ、第二次大戦期の米国における日系人強制収容時の信仰生活を論じた文献の講読、現代社会の呪術に関する論文集の講読、および研究室所蔵の脇本平也名誉教授の研究・教育資料の整理・分析作業を行う。

富澤 かな：近代インド周辺の宗教性やオリエンタリズムの問題を、特に言説と慰霊表現に着目して研究している。宗教と東洋(インド)と死と、

バラバラなテーマにも見えるかと思うが、これらはみな、近現代において世界と日常から疎外されてきたものである。そこに見られる、人間が自／他を分かち・結ぶ思考のあり方に関心を持っている。初年度となる本年度は、上記の関心に沿い、「宗教・東洋・死を語る視座」の特殊講義と、墓石から宗教史を見直す演習（S ターム）と、オリエンタリズム論と死生学の関係を考える演習（A ターム）を行う。

渡辺 優：「他者学」としての宗教学に惹かれ、信じる者の言葉を共感的かつ批判的に吟味することの醍醐味を知り、宗教思想研究へと向かう。近世西欧キリスト教圏に輩出した神秘主義文献の考究を軸に、「神秘主義」を再定義し、別様の「宗教」思想として現代に語りなおすことを試みている。本年度は、前期課程の比較思想（神秘主義再考）、西洋神秘主義思想史を通覧する特殊講義を担当するほか、演習では、キリスト教神学者の現代宗教論、ヤスパース、「女性」霊性史・神秘主義研究の基本文献を講読する。

志田 雅宏：学部では聖書のヨブ記の解釈をユダヤ教とキリスト教において比較し、大学院では中世スペインのユダヤ教思想を研究した。現在は、中世ユダヤ教世界における宗教論争を専門とする一方、現代的な諸問題にも関心を持つ。本年度は、ユダヤ教における「聖戦」の観念についての講義、現代ユダヤ教におけるフェミニズムについての講義、中世ユダヤ教思想（イエフダ・ハレヴィ『クザリ』）の講読演習を担当する。

佐藤 清子：学部以来、アメリカ合衆国を地域的対象に研究を行ってきた。歴史研究を中心としつつ、現代アメリカ宗教の動向にも常に注目し、近年は政教関係・宗教の自由の歴史を軸に探究を続けている。本年度はジェンダーや人種を分析概念に用いた宗教史研究について（S ターム）、また、現代における宗教と文化という観点から（A ターム）、アメリカ合衆国の宗教を事例に講義を行う。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

（5）卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承し

つつ新たな問いを發していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは平成9年度から始められた試みであり、毎年Aセメスターに開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあるが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

(6) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典や入門書がそろい、プリンター、スキャンも可能なコピー機があって、学習や発表の準備にはとても便利だ。相談役の助教、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大テーブルを囲んでの、学問的な語らいや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは1泊2日の研究室旅行である。学部生・院生・教員の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、3年生の歓迎会の意味もある。

(7) 卒業後の進路

就職先は、公務員・コンサル・情報通信・金融など、文学部全体の傾向とほぼ同じである。在籍中に宗教学独自の資格「宗教文化士」を取得することもできる。世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定される。研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。